

課題	提案	意見が出た 校区数
活動制限や自粛により、高齢者の閉じこもり等で社会とのつながりが低下し、フレイルが進行している。その為、介護が必要になる可能性が高く、予防への積極的な取り組みが必要。	市や大学(看護・リハビリテーション学部)と連携した、介護予防教室等の実施。 体力測定会の開催や老人会、いきいきサロンへの講師派遣などの協力を行う。 「かんたん体操とグラウンドゴルフの会」を対面にて定期的に実施する。 「くらわんかウォーカーズ」(ノルディックウォーキング実践グループ)の活動を紹介し、体験会からグループ活動に繋げるサポートをする。 新しくできた薬局と協力し、地域の高齢者を対象に健康講座や測定などを行っていく。	8
コロナ禍で活動が減少し、地域とのつながりが希薄化した。	各自治会や地域の活動者が中心となり、地域で他者との交流を求めている人に、身近な活動場所を紹介することで、地域活動に参加するきっかけにつながる。 密にならずにできる屋外での活動、少人数でできる活動を考える。(ノルディックウォーキング、健康講座など)	7
活動の担い手の高齢化により負担が大きくなっている。高齢化による人材不足。担い手の不足。 参加者が減少しており、新規参加者が増えない。	毎月のチラシを工夫し、活動の周知強化して興味を持ってもらえるようにする。 各自治会で同じ行事を開催する場合は共同で開催を行う。 グループ支援活動と個別支援活動の一元化。 自発的な活動が却ってリーダーやメンバーの負担にならないよう配慮しながらグループとしての活動を促す。 くらわんかウォーカーズの活動を継続することの効果と活動方法について、会合の場の設定など再度確認を行う。 新しい活動の担い手を見つけ、負担の軽減につなげる。	6
参加メンバーがいつも同じで、刺激が乏しい。 マンネリ防止、新しい取り組みが必要(軽スポーツを取り入れる)	他の老人会メンバーとの交流会などを開催する。 運営団体である自治会や老人会の集まりの時にサロンの紹介をする。 チラシ作成や地域の広報誌などを通じて周知活動を行い、情報を届ける。 地域で潜在する健康リーダーに働きかけ、協力を呼びかける。 人が集まってくる居場所となるよう企画・運営方法を考案する。 他校区で開催している情報を取り寄せる。 参加者のモチベーションの維持につながるよう1年毎に握力測定会を実施。(握力の変化を実感していただくほか、結果シートには認知症の気づきチェックリストも掲載し、セルフチェックとして活用いただく。) 参加者同士の雑談を通じた新たな内容を模索する。 体を動かす簡単なスポーツを模索する。(モルック、ノルディック・ウォーキング等) 屋外開催することでバルシューレなどができる。 新規会員の募集方法を考える。	5

<p>高齢者の居場所の不足                  サロン以外に通いの場がない。                  病院の待合スペースにコミュニティができています。そのまま場所を変えてどこかで集まって話ができるような場所がない。                  通いの場・活動の場の情報伝達の継続が困難</p>	<p>新たな活動場所を選定する。                  校区福祉委員会の合併後も、サロンの活動などは従来通りの場所で、地区ごとに開催する。                  旧校区での集まり、新校区全体での集まりをそれぞれ企画する。                  校区福祉委員が、気にかけている住民を個別に誘い、サロン参加へつなげる。次月開催サロンのチラシを用意し回覧する。                  福祉だよりなどを活用する。                  病院にコミュニティセンターを増設してもらおう提案する。</p>	<p>4</p>
<p>元気づくり・地域づくり会議の取り組みが校区ごとのため、他校区のことがわからない。</p>	<p>日常生活圏域で、元気づくり・地域づくり情報交換会を開催する。</p>	<p>4</p>
<p>多世代間の交流の場が少なくなっている。</p>	<p>校区コミュニティ協議会と協働で健康フェスタを開催した。                  小学校の体育館で、「健康」をテーマにスタンプラリーを実施し、子どもから高齢者まで参加することで、健康の知識を得られ、交流ができるようにする。                  地域包括支援センターが実習生を受け入れた際に、可能な限りサロンに来てもらう。また、地域の学校と、より緊密なネットワークを構築していく。</p>	<p>3</p>
<p>高齢者が安全に外出できる環境づくり。                  認知症になっても安心して過ごせる地域づくりに取り組む必要がある。</p>	<p>いすプロジェクトの活動を紹介し、協力を依頼する。                  小学生の通学路にグリーンラインなどを整備し、高齢者のウォーキングにも適した環境を整えることにより、高齢者の外出の機会を創出する。</p>	<p>3</p>
<p>災害時などの安否確認の手段や日頃の情報収集のための手段や方法も模索と習慣化が必要                  スマートフォンを使いこなせていない高齢者が多く、情報弱者となる懸念がある。                  災害時等の連絡体制の環境整備が必要。                  スマートフォン教室を一度受講しただけでは覚えられない。</p>	<p>非常事態時の連絡手段の確保のため、定期的に高齢者向けスマートフォン教室を開催する。                  出張スマートフォン教室の対応可能なキャリアショップを探し、校区内でのスマートフォン教室開催を提案する。                  自治会やサロンのメンバーに新規の参加を依頼する。                  再度初心者向けのスマートフォン講座を開催する。</p>	<p>2</p>
<p>民生委員が活動していくうえでの不安や悩み、プレッシャーを抱え込んでいる恐れがある。                  民生委員の欠員が多く、担い手がない。拘束される時間の関係もある。</p>	<p>校区民生委員定例会にて見守り活動についての研修会を開催し、エリア別にグループに分かれて意見交換を実施する。                  実際に民生委員が関わっている支援困難ケースにおいて、校区長を交えて個別地域ケア会議を開催する。                  民生委員の報酬は都道府県ごとに違うが、報酬を上げてもらえないか。                  自治会、コミュニティの中で推薦するのが良いのではないか。</p>	<p>2</p>

社会経済情勢の悪化による生活困窮世帯の発生	夜間・休日の緊急支援要請に対応して食料品等を提供できる体制を構築している。	1
活動の基礎となる自治会の加入率の低下	自治会やコミュニティの果たす役割の広報啓発する。	1
要支援者名簿の乱立	校区としての名簿を統一する。	1
運動以外の行事が少なく、運動が苦手な人が集う機会が少ない。	運動以外の活動として音楽関係の取組みについて検討する。 講習会の開催など、運動が苦手な人でも参加しやすい取組みを考える。	1
老人会やサロンなどに男性の参加者が少ない	男性でも参加しやすい趣味活動を増やしていく。	1
高齢者が気軽に学べる場がない。タイムリーな情報や地域の情報を得にくい状況にある。 元気に高齢期を迎えるための知識の更新が必要 地域で気軽に参加できる健康講座がない。	地域の薬局と協力し、近隣の高齢者の学びの場の提供やキャリアショップと調整し、スマートフォン教室の定期開催を行う。 近くにある開業医に依頼し、「健康寿命セミナー～元気な高齢期を過ごすためにできること～」を開催する。	1
地域活動が一部の校区福祉委員と民生委員の負担となっている。校区福祉委員活動と元気づくり活動が兼務となっている。	一部の活動者の負担を減らすために、校区でサポーターを養成していく。	1
老々介護世帯が増えてきているが、公共財がうまく使われていない。	第2層協議体で取組み検討	1
新任者は、元気づくり・地域づくり会議の活動などについての理解が不十分	校区コミュニティ協議会の会議などの各種会議で繰り返し周知を行う。	1
地域包括支援センターの存在を知らない地域住民が多い。	校区コミュニティ協議会の会議等の各種会議等や季刊誌で繰り返し周知を行う。また、自治会・グループ単位などでの出前講座を積極的に提案する。	1
地域に住む高齢者の認知症の早期発見や相談、支援制度が必要	地域で守り支え合う認知症支援について、校区で取り組んでいるひらかた夢かなえるエクササイズ教室の場を使い、認知症についての講座と脳機能チェック、支援制度の案内を行う『脳も体もイキイキ』を提案する。また、認知症すぐろくの体験会の実施をする。	1
活動の幅を広げる。	採点式のカラオケ機器で、カラオケを実施し、来年のNHKのど自慢参加へつなげる。	1
活動の場を設ける。	第7圏域 認知症カフェ開設に向けての懇談会を開催する。地域の実情や希望に沿った内容にして継続させたい。 コミュニティ協議会、自治会、校区福祉委員会からも、懇談会に出席する。	1
地域資源の活用	校方警察署の防犯教室にて講師を派遣してもらい何度でも繰り返し特殊詐欺被害防止公園を開催し啓発していく。明治乳業などの骨密度講習を開催し身体の健康について考えてもらう機会をつくる。	1